

『東京新繁昌記』 訳注の試み
初編・第三話「新聞社」

Lectures on HATTORI Busho's "Tokyo-shin-hanjoki"

Vol. 1, Chap. 3, "Shinbun-sha" (1874)

前二稿「学校」⁽¹⁾、「人力車」⁽²⁾に引き続き、明治初期戯体漢文の代表作の二である服部撫松の『東京新繁昌記・初編』(明治七)について、その第三話の現代語訳及び若干の注解を試みる。

新聞社 (現代語訳)

文明開化の先導役 それは新聞

今や井の中の蛙の如く、頑迷な夢の世界に眠り続けた時代は終わり、開化の春が一気にやって来た。文化は各方面で爛漫と花開き、新発明の類はあれこれと目もくらむばかり。国内でも海外でも、なるほどと感心させられる出来事の続出である。

時にせつかくの開化の花々も、芳香を嗅ぎつける嗅覚の働きが



『東京新繁昌記・初編』(明治7年4月・東京山城屋)より、「新聞社」の項の冒頭部(第15丁表)を示す。

文学部 国文学科

谷口 巖

(二〇〇一年九月十三日受理)

Department of Japanese Literature

TANIGUCHI Iwao

(Received September 13, 2001)

あつて始めてその美しさに辿り着ける訳だし、地球の向う側に勢力を拡げている文明人にして、実際に目に触れる写真などがあつて一層、その開化の実態に想像が及ぼうというものである。

王政維新の世とはなつたが、日本の国土は東西南北まことに広い。この全土を挙げて開化の方向に進めるのには、どんな文明の利器が強い味方となるであろうか。言つまでもなく情報伝達の豊富・迅速・活発化にこそは啓蒙活動の出発点だ。それゆえに、世間の熱い視線を浴び、雨後の筍の如く、最近四方八方にわれもわれもと刊行され始めたのが、新聞紙という訳なのである。

目下、東京の代表的な新聞社

どの社にもおのずから得意分野というものがある。政府から出される公布や裁判等の記事を得意とするのが日新真事誌(これは社が京橋の銀座にある)、東京府下の珍事奇談を探訪して報ずるのが日報社(この発行所があるのは浅草の茅町)、各地諸県の出来事を広く知らせるのが報知新聞(こちらの所在地は両国の矢の倉)、である。以上三社が都下では最も名高い。これらの新聞紙はいずれもが、開化の引札・文明の番付、といったところで、世の進展には欠くことの出来ない道具である。わずか一枚の紙でありながら全世界の新しいこと珍しいことを網羅し、新聞が伝えぬものは何もない。かつての読み売り先生の高調子もこれでは三舎を避ける訳で、その繁昌の現況は、むべなるかな、むべなるかな。

編集・印刷・販売の実況

さて社内に立ち入つて、その製作の現場を覗いてみよう。脚の長

い机を数個ずつ列ね並べて社員はいくつかの課に分かれ、それぞれが時間と勝負の大車輪である。東へ西へと飛び出して新しいニュース珍しいニュースを探る者。大小の役所に入入りして公布の本文を写して帰る者。机にへばりついて文章を仕上げている者。出来た原稿を手活字を拾っている者、などなど。千態万様だ。

明日出す予定の新聞は今日の午後の四時か五時にはもう仕上がっている。そんな芸当が出来るのは最新の印刷機のおかげで実に便利、アツという間に数千部だつて刷り上がるのである。菓子屋の丁稚が煎餅を焼くよりも簡単だ。

一部の値段はたつたの四、五銭。もし読者がひと月分をまとめて予約するなら、社の方から直接配達してしかも割引料金となる。ひと月分が五〇銭から七五銭といったところ。芸者の一夕の花代くらいのもの入りで世界の最新情報をやすやすと入手出来るという仕組み、全くこれは安い安い。

豊富・正確なその情報

さて、どんなことが新聞の記事となるのか、ざつと主なものを挙げて見ると、まずは政府の布告のあれこれ、海外からのニュース、今年の作物の出来不出来、物価の上り下り、貿易の好不調、開店の広告、芸者の美醜の品定め、戸長の勤めぶりの良し悪しなど、およそ耳に入り目に触れる限りのニュースは、ことの大小・貴賤にかかわらず、何でも彼でも新聞のタネとなる。

火事の報道なども迅速で正確、ざつとこんな調子。「昨日何日何時何々町より出火……」横浜発の火災の報知ともなるとさらにそれに、「電報によれば……」の一言まで付いている。これらを、ついで

の間まで読まされていた、「御近所の婆さんが子を孕んで最近赤猫を生み落としたそうナ」式のバカげた噂話と較べたら、天と地ほどの違いである。高い高い富士山のテッペンに登ってじかにヨーロッパの火事を見透したのと同じくらいの、速さ・間違いの無さである。

記事はまた処生の鏡

開化に遅れた田舎人種も、ひとたび新聞紙を読んで世の動きを知ると、たちまち自発的にザンギリ頭となり、ちよん鬚切ろうとせぬわが親爺どのの石頭ふりを歎く。さては又婆さんの、人前で裸になるのを何とも思わぬ態度を、ああ何たる野蛮の習俗ぞと思ひ至ると、五合の酒代を節してでも白い腰巻一枚贈りたくなる。親不孝者も雪の日に断固笏を握る¹⁰気を起こす。男好きの娘でも夜が更けるまで恋歌ばかり歌つようなことはやめにする。田舎の節婦をほめる記事は都会のふしだら女を戒めるのに効果があり、商人同士だつて、都会の働きのニュースは田舎のなまくら者の心掛けを改めさせる。こういう実例こそ、新聞紙がアツという間に全土に拡まり、世の開化におおいに貢献している理由と言えよう。

人力車の転覆記事も新聞に載る。他人迷惑な大きなおナラも新聞種子になる。それ新聞、やれ新聞。悪いことしたおぼえのある役人も新聞を見るのはおっかなびっくりだ。露見したら真つ先に新聞に載るだろう。戯作者だつてつかつかうかとしてはおられない。下手な文章を書けば即新聞紙上で袋叩き。恐ろしや、恐ろしや。

読者が参加する投書欄

世間で是非の議論を呼んでいることについてとかく自説を吐きたがり、話題の人についてもすぐにその長短を論じたがる人たちは、己の意見を長々と書いて新聞社に送りつけて来る。これを投書という。投書は採用されると印刷費会社持ちで紙上に掲載される。一種の読者サービスで、この際の新聞社の行為は、お寺で言えばお布施抜きでつとめる引導役といったところか。(甲の議論を乙の耳に渡してやることも確かに引導の字義に叶う訳だ)

伏竜・鳳雛¹¹を気取る浅草の御仁。臥竜¹²を自任する芝口の男。ロンドン(英国の首都)の演説家。ワシントンの大ぼら吹き。いずれもいずれも、役所筋からいまだ三顧のお呼びのかからぬのを不満に思い、みずからは大先生と称している者どもが、相争つてこの投書欄を利用する。何となればこの御仁たちの議論はいずれ劣らず大風呂敷で、灰吹から大蛇¹³の喩え(もし本当にこんな蛇説・邪法がまかり通つたら、大変だ)の如く、およそ誰一人それを信じてくれたことも無いからである。だからといって自説を国中に広めようには資金も空つ尻の面々ゆえ万止むを得ず、いつもベコベコのお腹を叩いては時代外れの旧説を吐き、それを新聞社に投じてくるという訳なのである。

投書の種々相

さてその投書の多いこと多いこと。四方八方から新聞社の机目がけ群がり集まるその有様は、まさにハリネズミの毛が一点に集まる如く、八エが目的の物に群がり寄るが如く、である。採用された投書類が紙面にうごめく様子は又、山羊たちがさいわい紙面の余白に

恵まれて、あちらをウメエーウメエーとなめ回し、紙魚たちが活字の黒く滲んだ部分に紛れ込んで、こちらをチユーチユーと吸っている姿にも喩えられよう。

美辞麗句の限りを尽くし、ペチャラクチャラと柳橋の風俗を評判している者は、どこかの銀行の番頭である。綿々と恨みを含んだ言葉を書き連ね、近頃吉原の凋落ぶりを歎いているのは、色男気取りの金持ちである。針ほどのことを棒ほどにも拡大し、筆一本で美人評など書きまくっているのはその道の好き者である。自分の妾を他人の妾と比較して、手前味噌ばかり並べているのは大の自惚れ屋である。

あるいは世に対する不平を暗々裡に言い表わす者がいる。あるいは悲憤慷慨の弁をあからさまに述べ立てる者がいる。あるいは人を使つて自分の手柄を吹聴させようとし、あるいは自分のことを述べようなふりをして他人の非をいろいろと指摘して見せる。このようなことに関心を持つ者なら誰も彼もが、たとえ紙片一枚でも、一文の意見を社に投じて、広く世間の紳士連に対し公開可能なのである。

開化先生と固陋先生との論戦

さて、最近の紙面では、長崎の開化先生と箱館(14)の固陋先生とが、遙かに居処を隔てつつ、居ながらにして数度にわたる大論戦を交えている。そのあらましを、以下にざつと示して見よう。

固陋先生(箱館)述べて曰く、「貴新聞社の新聞第何百何十何号を見ると、そこに開化先生(長崎)の、小生を叱咤するが如き投書が載っており、こんなことが論じてある。

自分は軽気球に乗って国内をあまねく飛行し、つばさに各地の風俗を見て回つたが、近頃の如くザンギリ頭に筒袖が当り前の時勢にめぐり合わせながら、未だにまま、髪はチョンマゲ腰には刀、の旧人種を見かけることがある。この連中と来たら滋養のある牛肉を喰おうとせず、沢庵漬けの大根(漢語の蘿蔔を俗にはダイコンと言ふのだ)をつまいうまいと嘯じり、足には革靴など履いたこともなく、ひたすら葬式用の冷飯草履を愛好するような手合である。ひどいになると太陽曆(15)を受けつけず、古臭い太陰曆を未だに用いている。日輪を月輪の門番(陽曆は陰曆の上という考えがこう言わせるのであろう)の如く扱うなんて、何とその愚かなことよ

事には順逆があり物には大小があるのを、この手合は知らないのであるうが。天地・日月と順序を立てて言つのはこの世の中の常識である。誰がわざわざ地天・月日などと言つものか。陽曆を捨てて陰曆を採る者は順序を逆に地天と言つのと全く同じことである

こういつた連中は因循病にかかつているのだが、最早その病気の中心は膏の上・育の下(16)へと移つていて姑息病へと転じ、寒気がするやら痛みが起るやら、とても我慢のなつたものではない。そこでどこから名医の来診を乞い苦しみから逃れようとするのだが、この期に及んでなお洋医の奨める奮発剤の方は毒薬だと言ひ張り、漢方医の処方する懶惰湯の方を飲もうとする。こういつた連中こそはまさに、生きてる限りマイマイツブ口同様の狭い家に住み、羨むものはせいぜいが井の中の蛙の知恵。やがて息を引き取る時には、必ず腹ペコペコの餓鬼道に落ちて、地獄の獄卒の車引きになること請合いなのである。何とこ立派な心掛けか、アア、アア、アア。世に言つ三歎(17)とは違つて、こういうのはきつと三歎息とでもいうので

あろう

読んでここに至って、自分(箱館の固陋先生)は込みあげる怒りに耐え切れなくなった。思わず拳骨を机上に叩きつけ、気づいた時には赤い血が、たら、たら、たら。結局赤貝の殻に詰めた膏薬一杯分を無駄にしてしまった。開化先生なる者はなお続ける。

願わくはこのような連中を引き連れて喜望峯(アフリカ洲)に登り、花咲くヨーロッパをそこから見せたいものである。そうした彼らも今少し物分りがよくなるかもしれない。この原因は全くわが日本に西洋風がまだ十分に吹き足りていないためであろう。ああ何としたらこの現状を打破出来ようか。そこで自分(開化先生)が考えた案は、日本国中から神主たちを大勢雇って天地の大小の神々に祈らせ、神風を吹き起こし、その神風におおいに西洋風の手助けをして貰おうというのである。そうすれば西洋風の文明は広く国全体に波及して、僻遠の地といえども都会同様馬車のにぎやかな声を耳にするに至るであろう。よって小生はこの新聞の余白を借りて、右私案の可否を、あまねく全国の有志諸君に問おうとするものである。

自分は読み進んでここに至り、こみ上げる涙はとめどなく目から溢れ、着衣の襟のグッシヨリと濡れるのを覚えた。(思わず机から新聞紙を取り上げてこう唸り声を挙げた。「ああこの熱涙を、我ならずして誰が流すものぞ。ああこの熱涙を、我ならずして誰が流すものぞ。ああこの熱涙を、我ならずして……)何となくこれは暴論だ。自分は断じてこの意見に反駁せずには居られない。開化先生(長崎)よ、いいか。わが発言をよおく聞け。

そもそも開化の進み・遅れというものは、ザンギリ頭とチョン鬚頭との差にあるのではない。そういうのをまだ一を知って二を知ら

ぬ議論というのである。自分は辺地の箱館に住む固陋の一生ではあるが、すでにして数町歩の田を耕し、巨大な居宅をも建てている。食べるものに不足はないいつも満腹の腹鼓を打ち、太平樂の唄は自然と口をついて出る日々だ。ああ、何とこの世は楽しいことか。

自分の見るところ、世間で開化開化とやかましく言いたてる者は、たいていが自身の貧乏書生であって、牛肉店に入りはするが口に出来るのはせいぜい端の方の余り肉。そんなものに満足して、さて住んでいる所と言えば、五階建ての家を建て金庫を造ったなんて話は、ついぞ聞いたことがない。気持ちだけは開化しているつもりでも、財布の中が一文無しではせっかくの開化もやがて因循病へと変わり、遂には西洋人の店の居候となって、辛うじて命をつなぐようなことになるであろう。そこでやっとこさ、自己への過大評価から目が醒め、それでもやはりとなお仕官の途など求めてみても、三顧の礼どころかおよそ振り返ってくれそうな筋も無く、最後には蜘蛛の巣にからめ捕られて、虫けら同然の死を待つばかりであろう。

ものごとには急速に変化し得るものとそれが出来ないものがある。牛の糞はいつまでたつても牛の糞であって、ついぞ味噌に変わった例を聞かない。人間だっていろいろあつて、老年者の固陋なる者を変化させることは最早無理であるが、青・壮年の因循なる者に関してはまだその点を啓発出来る可能性もある。これがすなわち、最近政府が全国的に学校を設け、教育に本腰を入れている理由なのである。重ねて貴君の下手糞な弁説を聞き、お説教を承らねばならぬ理由などどこにも無い」

さてこの舌戦は同新聞の第何号より第何号にまで及び、遂に以下の社告が出てケリとなった。曰く、「何某先生の投書として載せて

来た文章は、実のところ寝惚先生の寝言の誤りであった。よつてその全文を取り消し、訂正する。」

棒手振り商人の決意

一人の棒手振り¹⁸が、午砲¹⁹の音を耳にして帰宅した。家は裏通りのその又露地のどん詰まりにある。部屋へ入るやいなや正座をし、大きく息を一つついてこう言った。「今日から俺は博奕は止す。かわりに字を習つのだ。そして世間で言う紳士というものになつてみせる。」この男いつもなら胡坐をかくが片膝立てて坐るところ、今日正座をしたというのは生まれて始めてのことである。次いで女房の方へ向き直り、ギョロリと目をむいてこう言った。

「おい。今日は大事な話がある、聞け。お前て奴は普段家から出ればきまつて焼き芋を食らい、家に居る時は必ず茶碗酒を飲む。何という不行儀な奴だ。飯を炊くだけの働きはするが、その金といやあみんな俺の稼いだものだ。酒は五合あれば五合、一升あれば一升、最後の一滴まで残さねえくせに、一文の銭だつて稼いだことはねえ。いつも質屋の性悪婆アとつるんでいて呉服屋のおかみさんの悪口ばかり言つている。何という不出来な野郎、いや女郎だア。」

お前は大的おしゃべりで、口答えばかりはたつしゃで、俺が一言しゃべれば十言ぐらい言い返す。その台詞がいちいちまた癪にさわるんで俺は黙つちやいらねえ。果てはいつも大喧嘩をおつ始め、世間様の物笑いの種子となるという訳だ。そこで俺は断固、決心をした。今日限りお前を離縁するッ、言つが早いか、彼は立ち上り、矢立ての墨を筆に湿して三下り半らしきものを書く。

女房の冷笑、あわやまた一触即発

女房は平然としてこれに応える。「チエツ、笑わせるんじゃねえよ、全く」そこで壁一枚隔てた隣の女房に声をかける。「おい聞こえるかいお隣さん。うちのはげ頭のだんつくが、どこかの白狐²⁰にたぶらかされたとみえて、何だか毛唐人の寝言のようなことを言つてるよ。面白いからこつちへ来て、一緒に聞いてもらんよ」棒手振り¹⁸が言つ。「何だと、黙れエこの野郎オ」「何が黙れたよオ何が」女房のだみ声はいつそう高くなる。

棒手振り¹⁸はカツと来て胸は煮えくり返り、体中に火がついたようになつた。思わずおきまりの拳骨を固め女房の頭目掛けて一発喰らわそうとする。が、その時ふといつもと違う自制の念が心を過ぎつた。「そつだ。ここでこの怒りを我慢するのが、紳士の修業の第一歩なのだ」そこで一転憤怒の形相をやわらげ、古女房に向かつてこう言つた。「お前、ちよつとだけそのおしゃべりを止しな。今日お前を離縁しようというのにはちゃんとした訳があるんだ。いいから耳の穴をよくかっぽじつて、俺の言つことを聞くがいい。」

天下に恥をさらした罰金一件

今日俺は、八百屋物をかついで、あの大金持ちの何屋まで届けに行つたもんだ。すると店先じゃあ、たまたま番頭が新聞を読んでいたが、声を出しながらの拾い読みだから、近くの俺にはみんな聞こえちまつたという訳だ。記事にはこんなことが書いてある。

某町ノ裏通りニ住居セル某ナル者アリ。常ニ放蕩無頼ニシテ人倫ノ道ヲ心得ズ。ソノ女房ナル者又底抜ケノ卑シキ性ニテオヨソ飲食物ニ目無シ。兩人トモドモ欲ノママニ暮ラセバ米櫃ニ米ノ有無ヲ

モ知らズ。飢エニ至ルコト屢々ナレバ女房マズ怒リヲ発シ、女房怒レバ亭主怒鳴リ、亭主怒鳴レバ女房逆上シ、遂ニ八亭主女房ノ鬚ヲツカシテ頭ヲ張り、女房モ又負ケズ亭主ノ鞆丸ニ手ヲカケソレヲ捻ル。カクテ連日連夜コノ家ニ喧嘩口論ノ物音絶エルコト無シ。

コノ開化ノ世ニシテカクノ如キ愚カナル夫婦ノアルコト全ク驚キナリ。今ノウチニ懲ラシメヲ与エザレバノチ開化ノタメニ八大ノ災イトナラン。幸イニシラ何月何日コノ夫婦、巡回中ノ邏卒⁽²⁾ノ目ニ触レ、違式註違條例ノ定メルトコロニヨリ、遂ニ罰金イクバクカラ出スコトニナレリト言ウ

どうだ驚いたか。先日俺たちがきつくお叱りを受けた例の罰金一件が、新聞の記事になってすっかり出てるといふ訳だ。俺は思わずおでこにとつと汗をかいた。恥ずかしさで体がぐらぐらした。

新聞は世の木鐸なり

恥をかくようなことをして新聞に載れば、その評判はアツという間に日本中に広がる。ほどけた蓆なら巻き戻すのは簡単だが、広がった恥となるとそうはいかぬ。立った煙もほつときゃ消えるが、新聞に載った俺たちの名はずうつと残るてえ訳だ。おめえはどうしようもねえ馬鹿だが、そのおめえだつて今の俺の話の聞けばいい気持ちはずめえ。

そこで俺は今までの過ちを改め行いを正しくし、いつか断然紳士となつて、この恥をそこごとくかと思つ。おめえに暇を出そうといふのは、そのために俺がまずしなきゃならぬ第一のことよ。それでももし、おめえが、俺同様に過ちを悔い、今後は身をつつしむといふなら、離縁のことは又別に考えてもいいぜ」

兩人の回心 メデタシメデタシ

女房は頭を垂れ目には涙を一杯ためて言った。「アアア、わたいが悪かった悪かった、許しておくれ。今日を限りわたしも行いを改め操をつつしめ、いつかあんたと並んで淑女として、新聞に載りたいよ」そしていきなり立って酒瓶を手に取り土間に投げつける。瓶は木端微塵。空を仰いでさらに言う。「南無、お天道様お天道様ア。もしこれが嘘になつたら、どんな罪でもお当て下せえまし」

亭主が言った。「エライぞお前。悪いと気がつけば、すぐに直すうとする、その態度。さすがに俺の女房だ。お前にも十分、淑女となる見込みがあらア」

初編・第三話「新聞社」終り

注

(1) 谷口巖、『東京新繁昌記』訳注の試み 初編・第一話 学校(明治七)、『愛知教育大学研究報告』第三二輯(人文科学)一九八二。

(2) 谷口巖、『東京新繁昌記』訳注の試み・続 初編・第二話「人力車」、『愛知教育大学研究報告』第三二輯(人文科学)、一九八二。

(3) 明治五年二月八日(太陽曆換算三月一六日)、英国人ブラック(John Reddie BLACK)により創刊された邦字新聞。発行元は東京・貌刺屈(ブラック)新聞社。隔日刊からスタートしたがじきに日刊に転じた。政治・社会の問題に関心が深く、板垣退助等が左院に提出した「民選議員設立建白書」の掲載(明治七・一・一八)の拳によつても知られるが、その後政府側からの

- 干渉を招くに至り、明治八年二月五日廃刊した。
- (4) 明治五年二月二日(太陽暦三月二十九日)に日報社が創刊した新聞の名称は東京日日新聞、今日の毎日新聞の前身にあたる。東京の日刊紙の嚆矢、定期購読者には宅配サービスを行った。社業順調で、明治七年五月一日には社屋を浅草から銀座へと移している。記者として特に著名であったのは福地源一郎(明治七年入社)で、その論調は概して政府に近く、当時 御用新聞と揶揄的に言われることも多かった。
- (5) 明治五年六月一〇日(太陽暦七月一五日)創刊。正式名称は郵便報知新聞で、その発刊に際しては、本邦郵便制度創始の功労者前島密の指示に拠るところが多いという。ニュースの取材、販路の拡張等にあたり初期には、文字通り郵便制度を有効に利用するところがあり、豊富な地方ニュースの収集にも特色があった。明治二十七年二月二六日以降、報知新聞と改称。
- (6) 引札の通常の語義は、商店の売出しの際などにおける宣伝、広告のちらし。
- (7) 番付は、芝居や相撲の興業の際配布される、出場者の順位、組み合わせなどを書き出したもの。
- (8) 江戸時代、世間の出来事を瓦版に刷ったものを、節面白く読み上げながら売り歩いた者。
- (9) 東京・横浜間に「電信」が開通し、その運用が始まったのは、明治二年二月二五日(太陽暦、明治三年一月二六日)
- (10) 二十四孝中の一人が親の求めに応じて、雪中に筍を探したという故事を、面白く転用したもの。
- (11) 原文は「伏雛」「伏竜」と「鳳雛」とを意識的に結びつけて
- 一語としたものである。 「伏竜」は地中にひそむ竜、「鳳雛」は鳳凰の雛で、ともに大才を持ちながらまだ世に認められていない人物の意を寓する。
- (12) 「臥竜」は寝ている竜の意で、前項同様の人物のたとえ。通常、三国時代、蜀に招かれた諸葛孔明のことを指す。
- (13) 「灰吹から大蛇」とは、煙草盆に備えつけられている灰吹筒から立ち昇る煙がいつの間にか大蛇に変身する、の意で、およそあり得ないようなことの出現を諷する。
- (14) 元来「箱館」と書かれていたハコダテが、「函館」と表記されるようになったのは、明治二年の箱館戦争後。撫松は意識的に古い表記を選んでいたのである。つか。
- (15) 太陰暦から太陽暦への切替えは、太陰暦明治五年の年末に近い時期に行われた。すなわち政府は、従来からの暦によるこの年の十二月三日以降を、明治六年一月一日、二日、三日(太陽暦)と読み替えることにし、詔書をもってこれを布告したが、長年なじんで来た陰暦に対する国民の生活意識は、一気にこれを捨て去ることはなかった。
- (16) 「膏」は元来胸の下方。「育」はさらにその下の腹との間を隔てる薄い膜の意味。「病人膏肓」とは病が回復不可能な状態に入ったことを意味するが、筆者は開化先生にこの句を誤用させて、投書者の知ったかぶりに対する滑稽感を高めている。
- (17) 「三歎」は、何度か声に出して歎賞する意。参考「吾子置食之間三歎、何也」(左伝)。
- (18) 荷物を天秤棒にぶら下げ、声をあげて売り歩く人。
- (19) 正午の時刻を知らせる空砲。東京では当時の兵部省の発案を

太政官が認め、旧江戸城の本丸に大砲を置いて、明治四年九月九日より実施された。時計の普及率の低かった当時では大変重宝され、一般にはドンの名で親しまれた。

(20) 年功を経たキツネは毛が白くなり、しばしば人を化かすと言われた。

(21) 維新直後、社会の治安にあたる新組織の必要を感じた政府は、西洋の Police の制に倣った。今日の警官に相当する人員は初期には、原語のままのポリス、あるいは番人、また取締等と呼ばれたが、明治四年～五年には邏卒の語も用いられるようになり、さらに明治六年には巡査の語も現れていると推移した。

(22) 違式註違条例は、今日の軽犯罪法に相当するもので、当時各県ごとに発令されその内容も少しずつ異なっていた。明治五年一月発令の東京府の場合、その「註違罪目」の中に「喧嘩口論及び人ノ自由ヲ妨タゲ且ツ驚愕スベキ噪鬧ヲ為シ出セル者(第四四条)なる一項があり、罰金の額は、六銭二厘五毛ヨリ少カラズ、一二銭五厘ヨリ多カラザル 範圍、と規定されていた。棒手振り夫婦は、この適用(罰金を出す能力のない場合には一～二日間の拘留)を受けたのであろう。

なお付言すれば、江戸期の庶民風俗ではごく当り前のことであつた人前での脱衣の習慣も、この法では同様にお咎めの対象となつており、前述東京府の場合、「違式罪目」中第一二条に、裸体又は袒裼シ或ハ股脛を露シ醜体ヲナス者 なる一項がある。こちらの方の罰金は、五〇銭ヨリ少カラズ、七五銭ヨリ多カラザル 範圍と定められており、支払い不能あるいは拒否(の場合には、何と「笞罪」)一〇ヨリ少カラズ二〇ヨリ多カラズ)

が適用されることとなっている。
風俗の上でも急速な近代化(＝西洋化)を急ごうとした、当時の為政者の、懸命の「文明」の姿勢が、見えて来るようである。

二〇〇一・九・三 稿